

に於て自分わ人の眷顧ばかりに依頼するのは男子の爲すべき事でない、自活わ神聖である、獨立(或る範圍)わ立身の基礎で尊重すべきものであると云ふ事を深く感じまして、斷然縁家を去り、専ら他人の間に於て相當なる務めをして自活と修學との資を得ました。其間に蹉跌して止むなく目的を變換しましたが、結局今日でわ小學校の訓導を務めて居ります。(終り)

評。取り出で、ごうさいふ節はなけれど、おち付きたる書き振り、樂しかりし毎夜のお伽話に吾も自ら引き入れらるゝ心地しつ。

幼時の家庭 (三等)

東京 平野ゆき子

小雀の聲を高く聞き、菜の花の黄金いと近く見て、ちらくちらくとふりくる花吹雪、東風ゆるく香を

送りて袂を返すに、胡蝶ゆたかに飛ぶなど、實に春の日の景色眺めて何人か心に邪をかめや。

人の世の春なる幼なき頃の家庭のさまの、しかく樂しき人こそ幸多けれ。嬉しき我が父が學資出して小學校に通はせしめぐみによりて、子といふもの、盡すべき孝道は聞き知れり。さるを今父母の名を汚して、忌むべき我家庭を人に知らしむる我罪を問ひ給ふ、こひねかはくは讀みて其罪の何れにあるかを教に給へ。天真爛漫とか云ひて愛すべき幼時のものかたり、はづかしさを忘れいひいづる我身の上、春ならねども立てめし霞、うすもの帷したらんが如く、かすかにをほる氣なれど、妾には初めより母なし、唯乳母の八重の何となくなつかしう、慕はしうて、片時も傍はなれし事なかりしに、ある冬の夜半なりき、父も祖母も姉も

叔母も他の下婢等も暖かに眠りにつきし後なりき、長き間、針手に持ちし八重の我顔つくづくみては涙くむさまのわやしまれて、「八重よ何れへ行くや」と妻の間ひしに「否とよ八重は何處へも行き侍らず、をとなくやすみ給ひね」としてしばし妻の傍に横はりしが、夢かうつゝか「わはれ不幸の子よ、卿が姉は其母の世を去りし計りに人に愛さるゝに、幸うすき次子よ、此後ともよく父上に仕へませ」といとかすかにひびく言葉の耳に残れと、主の影はいつしか消えたりき。此翌日より八重の姿見えざりけり。

叔母の罵る聲、父の怒る聲は日一日とまざりて、兎に角く妻は麻布なる親類の養女となりぬ。そは我姉のまだいとけなきが上に、妻の八重を慕ふがうるさしとてなりと後にきゝたり。

妻は麻布に移りし後は、日毎楽しく遊びくらせしが、八重の事は忘れさりき、七歳の四月近きわたりの學校に入りてし時、ふと八重の我牛込の實家に戻りぬといふ噂きゝて、養母に一度家に歸らしめ給へといひしも聞かれざりき、されど其他の事は妻のまゝならざるはなく、母なき我實家よりは何事も楽しくて過せしが、翌年一月妹（養母の子）出生せし時より妻は悲しき身となりぬ。そは母の行ひ心得かたう變りしにて、好人の養父は店番の外は何事もせず、飯の時のみ顔見れども、養母の前故ものいふ事もならず、日毎赤子背負ひては使ひはしり、洗濯などに、學校休むもめづらしからず、妻が香の物嫌ふとて副食物あたへざるは、まだよし冬の寒き日、妹の衣服洗ひし手を火鉢にかざす間もなく、次子よ最早正午ならずや、物

置より香の物出し來れとの命令いなみ難く、殊に
 妾は幼きより此養母に育てられて我まゝのみなし
 習ひし故、香の物など持つ事だに好まず、思はず
 顔をむけしとして煙管取りわけ妾の頬をしたゝか打
 ちし末、其香の物切る時、捨つる部分多きに過ぎ
 たりとて、一度捨てし物を汚れしまゝ、妾の皿の
 上にのせつ。さて妾が食ひ得ぬを見て「我儘物。」
 と叱りし上に妾が誠の父と母（は死せしと思ひし
 に）の事わしざまにのゝしり「あの人に此の子は
 當然よ」などいふ。子供心に口惜しうて「否、母
 上、妾の父も祖母も此の事深く心をいためて行末
 を案じ居れど…」云はせも果てず「心憎くき物言
 ひ振りよ」と妾の口押あけて無理に汚なき香の物
 押し込みぬ。此の様目の前に見乍ら妹を抱きて無
 言なりし父も、夏の暑さ日中に庭の草むしれと母

に命せられしに、直になさゝりしとて、夜に入り
 けれど家に入れず、身に一ツの下帯させしまゝ庭
 の木に縛り悲しむも知らぬ振、泣けど叫けべと聞
 えぬ風して蚊帳の中に入りし養母に詫して此時計
 りは妾の爲を計りき。妾は漸く家に入るを得て食
 事せしに、父が蚊やりする杉の青葉の烟り喉に入
 りてむせかへれば「ソレ食過ぐる腹も身の内でふ
 事知らずや」と膳臺所に押やりぬ、あゝ我養母は
 かくて妹を愛したりき。人。同じ人の子なるもの
 を、他人の生みしと我生みしとは斯く計りの差あ
 るものによと思へば我誠の母のこひしうて〜
 學校用の半紙は一日一枚の定めなるに、友どち
 が鼻血出し、時に反古與へし爲に、七時間戸棚の
 閉悶にあひ、親しき友の花簪妾にめぐみし時に返
 して來よ、家風なれば一切物もらふ事許さず」と

申渡されし時の悲しさ。朝夕の水汲み座敷掃除、飯までかしぐ身は午後より學校に出づる事もめづらしからず。校友に初めはあやしまれ、後にはいやしまれて愈我實家の慕はしく成りゆきし折も折遂に一度牛込に歸る事とはなれり、父上、姉上、祖母殿、叔母様も如何に暮して居給ふかと思ひつゝ、家に歸れば、嬉しや母上、妾が常に物足らぬ心地せし母上ありき、然かも其母上は常に慕ひくし八重なりき。四とせ餘り見ざりし家の内に母ありて、妾を抱きて「を、次子よ」とばかり我顔眺めし目に涙溢れたるを、我は嬉しさに心うばはれて氣づかざりけり。翌日父は例の如く車にて出でゆきしわと、四年前はあらざりしか、心つかざりしか、叔母のみ家中に威を張りて、母の目の前にて「成り上りもの」といふが耳障りなり其度

毎に母が顔をむけて涙ぐむは何の故か、妾はたゞ悲しくて、祖母は相かはりもせず姉の事にのみさわぎて、其爲に母の顔に唾はさかけし事すらあり。一日妾と姉と二人して二階の梯子にて手まりして遊びし折、二階の坐敷にて父のいそがわしく母を呼ぶ聲に、母の急き梯子登らんとて、あやまちて姉の手ふみけるに、姉はさのみにもあらぬに聲張りあげて泣き出せば、父はたゞしう出來りて、妾の足をいたくふみて驚く妾に目もかけず見ずや次子とても足ふめば泣くわ初子よ母の傍を去りて來れ、をよき菓子と與へんと父の聲聞えたれど、足の痛さに泣き居たりければ其後は知らず。此事も何の故か更に知らざりき。其後妾は母の涙に送られて、再び麻布の家に歸りき。まゝしき母、或ひは妾のまゝ子心一に育てられ、時に

實家に還りて母に慰めらるゝ事あるも、妾は遂に正しき道進まざりけり。かくて父母に心づかひ掛けし事も度々なりしが、今年十七歳の春初めて母の誠の身分とをひたちなどさゝてやうやく誠の人に歸り、看護婦志願にて某病院にあり。過ぎし事ども思ひ出づれば人に言ふはをろか、我と我身にはづかしき事多し。あゝ誰の罪なりや。妾は物淋しき夜半、獨過去の事ども思ひ出でゝは妾の實母遠山八重子をうらむ事すらあり、妾はかくて世をうらむ事多きが故に、母は猶我身を氣づかふなり、妾は母に向ひて安んじ給へ、妾は米國のモルヒネ夜叉トブパンを學ぶものにてはあらず、たよりなき病ひになやめる人のみとりするが願ひなり、といふが常なりき。

五。幸少かりし家庭に生ひ立ちて、今は多くの人に幸を授くべくなれる御身の上こそ奇しくも尊きけれ。

幼時の家庭

岡山操 女

私の生家は、昔よりの田舎家、住む人少うして、室の數多ければ、他に居を定むるの要なしとて、兄上の工場にて、使ひ玉ふ職人ども、十人餘宿らせ居れば、殊に賑やかなり、兄上は姉上を娶り玉ひて、十年目なり、其間に三人の子供生産したりしかど、皆亡せてたい今年四歳になる、國夫と云へるのみいとも愛でいつくしまれ、掌の上の蝶よ花よと、養育し玉へは、他の人等も皆御機嫌のみ取りて、萬殊の外我儘なりき。母上は未だ、年若けれど、八年前に父亡せ玉ひしより、世は兄上に譲りて、諸事心にまかせず、只國夫をいつくしみ玉ふ事のみ仕事の如し、この中へ丁度嫁き居たりし私の、三歳になる桂二と云ふを連れ子して